○９月は自殺予防週間(9/10 ～ 9/16)、障害者雇用支援月間、高齢者元気・ふれあい推進月間

十島村教育委員会だより　平成 29 年８月号

むらやまかーカラ情報

南北１６０km　「心をつなぎ　気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会
〒 892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号
TEL　099-227-9771

８月・・・二つの講演から

十島村教育長　有村孝一

8月3日は、市町村研修会が開催されました。会は、市町村長をはじめその関係者等約1000人を超える人たちが参加していました。その中で、二つの講演会を聞くことが出来ました。二つとも大変興味深いものでしたので、振り返りのつもりで、記してみたいと思います。

1人目は、ＴＭオフィス代表取締役 殿村美樹さんによる、「ブームをつくる　みずから動く仕組み」という演題の講演でした。

聞くと、誰でもが知っているような事を手掛けておられました。「佐世保バーガー」を全国区に、日本漢字能力検定協会と契約を結び「今年の漢字」を手掛けたり、「さぬきうどん観光」の定着、彦根城築城400年を記念した「ひこにゃん」を前面にした「ゆるきゃらブーム」へのつながりなど2000を超えるプロジェクトを推進してきておられます。その基本にあるのは、「お金をかけないＰＲ作戦」でした。

例えば、巡礼は古くからおこなわれていますが、だんだん高齢者が多くなってきています。そこでは、甘いお団子が付き物であることに注目し、「スィーツ巡礼」とネーミングを変える事によって、若者や女性の参加者を増やした話。煮干しが売れなくて、子どもたちからも敬遠されがちだったとき、名前をさかさまにして、ボッシーニとしたところ、イタリア料理みたいとみんなに食べられるようになった話。亡くなられた日野原重明先生が、成人病を生活習慣病と名前を変えて、あらゆる年代に注意を払うようにさせた話も例にとりながら、岩手県の「すりゴマ団子」のゴマが顔に着くので食べづらいということで、ゴマをあんと一緒に中に入れて、「ゴマスリ団子」として関西で開催された菓子博覧会に出したところ売上トップになった話。など目からうろこの90分間でした。

2人目は、歴史家の 加来耕三 さんによる「明治維新から百五十年、現在そして未来を考える」という演題の講演でした。

歴史は、今の自分が直面していることに、いかに過去を活用できるかということに尽きるという話でした。

明治維新はいつからかということについて、ペリー来航からではない。その12年前のアヘン戦争からである。それは、清王朝の封建制度が崩れたからである。ペリー来航でなぜ驚天動地（世間をあっと驚かせること）になったか、それは、ペリーの船が品川沖まで進み船に備えてある４ｋｍ飛ぶ大砲から江戸城が射程圏内に入ったからである。その頃の我が国の大砲は300mぐらいしか飛ばなかったそうです。

また、興味深かったのは、十島村の宝島にイギリス坂というのがあります。幕末に外国船が来るようになり、宝島にイギリスの商船が来て、水と食料を要求しました。言葉が通じないまま船員たちが牛を強奪し発砲したので、応戦して一人を射殺して追い返しました。そのことが江戸に伝えられると、その翌年、異国船打ち払い令が幕府から出されたという話です。何と身近な話が出て驚くやら、うれしいやらでした。二つの話を聞きながら、十島村でも何かできないかと考えることでした。厳しい大自然を逆手に取るのは何かないかということを改めて考えてみました。

口之島の海流発電はそういう意味では、逆手に取った形ではないかと思います。

十島村「海外派遣ホームスティ事業」in　Australia

本年度からオーストラリアへと留学先を変更しました。派遣人数は、例年通り５名でした。

学年により出発日が異なりましたが、帰国は、８月２４日（木）の同じ日となり、同日午後４時から役場会議室で報告会を開催しました。

本年度の派遣生は次の５名でした。

①上田ラナさん（小６）②森清香さん（中１）
③久永太陽くん(中２) ④山元柊星くん（中２）
⑤日高七海さん（中３）

【報告会での様子】（派遣生の発表から）

・英語の先生が面白かった。宿題も英語で書いた。ブリスベンは思っていたより大きかった。
・挨拶の仕方がハグだった。ホストファミリーに囲まれて、楽しい思い出ができた。
・初めはコミュニケーションに慣れるまで時間がかかった。スマホの翻訳機能を使っていねいに教えてくれた。思い出もたくさんできた。
・英語に慣れることができた。この経験を、学校や社会での生き方に役立たせたい。
・このような機会を与えてくださった十島村、十島村教育委員会の皆様に感謝したい。

※　帰国後、一層たくましくなった姿に、この十島村の海外派遣ホームスティ事業の成果を見た気がしました。

シリーズ――新聞に投稿１
（平成29年７/３南日本新聞掲載）悪石島小2年　片野田 音

はじめておにいちゃんになった

「ああん」。ぼくが、しゅじゅつしつの前のソファでまっていると、元気なこえがきこえてきました。こえがとっても大きくて、元気な赤ちゃんが生まれたんだなとおもいました。

すこしまっていると、あたまにちがつくはこばまのすなベッドにちんが、小さなのつてはこばれての赤ちゃんが、目は、光りがまぶしそうにぎゅつとじてきました。たまに、いちごぐらいまいました。足と手は、ねむたそうに小さくて、まっ白でした。

あがるとこしをすることもありました。

やっぱりおかあさんのにおいがしました。

にんしてみると、とてもおもたくて、赤ちだかあさんはベッドにねたまんがつくこびをかけてあさんのおなかにあぼ、おはとても赤くなっていました。

出てきましたを見ておいると、おいがしました。

赤ちゃんは小名前はなこえで「円だよ」ときくと、おかあさんが名前は、ぼくが考えた名前でしたとてもうれしい気持ちになりました。

ぼくは、ここの名前は、はじめておにいちゃんになります。

「たつしのだよ。円と円。」

しいには、はじめてのおにいちゃんになります。

早くあそかぞくぜんぶだく６人でいちゃんになりたくくらしたりし、おかあさんいとおもいまじんくなってね」

シリーズ――新聞に投稿２
（平成29年７/９南日本新聞掲載）
諏訪之瀬島小1年　鎌倉 陽菜

じぶんのことじぶんで

「やったあ。１ねんせいになったぞ」。にゅうがくしきで、とうみんがたくさん、はくしゅをしてくれました。「じぶんのことは、じぶんでできる、じょうきゅうせいになるぞ」とおもいました。

「じぶんのことは、じぶんでできるようになってきました。きゅうしょくやはきものは、すごいなとおもいました。

１ねんせいは、５・６にんになったのじゅんびなど、やることがたくさんあります。まねをしたいとおもいます。

１年生になるぞ。はじまりました。

はじめてのじゅんびなど、やることがたくさんあります。

めがまわりそうです。うまくいくようにがんばりたいです。

子供のうた（7/25）

諏訪之瀬島小
２年　濱田千明

水えいきょうしつ
すいすい　およいでる
すいすい　みんな大すき水えいだ
あつい　今日は　見ているぞ
あつい　すいすいとつめたいと思ってたみたくさん
すい夏にはちょうどいい
すいすい　およげたよ

シリーズ――新聞に投稿３
（平成29年7/26南日本新聞掲載）口之島小6年　長谷川 宇宙

おいしかったカレー

7月7日から2日間、臨海学校があった。小学1年生から中学生まで、全児童生徒11人で活動をした。

中でも一番心に残ったのはカレー作りだ。「ぼくは野菜を切る担当だった。先生に「切る方といためる方、どちらがいいですか」と聞かれ、野菜を切る担当を選んだ。

理由は、臨海学校の2日前、ぼくたち5・6年生は調理実習をしたからだ。久しぶりに包丁を使い、使うのが慣れた気がした。そこで復習と練習をかねて、使ってみたかったのだ。

最初は、野菜を押さえる手の「ねこの手」があまりできなかった。でも、だんだん慣れて、うまく切ることができるようになった。

それと同時に、速く、細かく切ることもできるようになった。

お母さんが作るカレーもおいしいが、ぼくたちが作ったカレーは、いつもの2倍も、3倍もおいしかった。お母さんの手伝いをすることがあれば、また野菜切りをやってみたい。

シリーズ――十島村で学ぶ
正しさとは　諏訪之瀬島中3年　秋鹿壮火羅

僕の祖父は、僕の通学している学校の校歌を作りましたが、どのような思いを込めて作ったのか、知りたくなりました。特に、校歌三番ともに出て繰り返される「われらが諏訪之瀬まなびやに光輝く真理あり」に注目しました。

真理とは「正しいことで嘘偽りがないこと」という意味があり、繰り返される部分には「真理を追い求めよ」という意味が込められていることを祖母から教わりました。これらのことから「学校は正しいことを追い求めるところ」だという意味が込められていることが分かりました。その校歌は、亡くなった祖父が意味を込めて作っていたことがわかり、誇りが持て、嬉しくなりました。

だから、この祖父が残してくれた校歌の歌詞である「真理あり」にある意味を胸に秘めながら、「正しさとは何か」を学校で求めていきたいと思います。

諏訪之瀬島小中学校からのメッセージ

諏訪之瀬島小中学校　教諭　山中一樹

極小規模校の生徒のために日々がんばってきたが、今年のバドミントンの全員敗退は相当悔しかった。生徒・保護者・里親にとても申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

私自身は、前日、練習や練習試合の状況から練習メニューを考え、翌日の練習に臨んだ。生徒たちも張り詰めた緊張感の中で必死に練習や練習試合に臨んだ。

しかし、生徒５人全員は負けた。そして、力の差をとても感じた部分があった。冷静に振り返ってみると指導の基本的な考えの甘さに気付いた。私が考える基本的な考えの甘さとは「ネット型競技だから、最終的には相手コートに返せばよい。少々高くなっても、少々中央になってもシャトルを返しさせすればよい」であった。

この甘い考えで生徒を試合に臨ませてしまったが、対戦相手は、ネットギリギリの高さで、サイドラインなどギリギリのコースに打ち分けてくる現実を見ると指導方針の差を感じた。加えて試合中、技術的なアドバイスよりも精神的なアドバイスが多く、反省しきりだった。

勝つことがすべてではないが、諏訪之瀬島の体育館で、苦しい中にも真剣な表情で必死にプレーしている生徒を見ていると、やはり勝たせてあげたかった。

来年の中体連に向けて、今の内から準備を進めていきたい。

～私からのメッセージ～

十島村の全小中学校は極小規模校で先生方、御一人御一人が、児童生徒にとって先生しかいない現状です。これからも目の前の児童生徒のために全力を尽くしましょう。